みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

菜猪とよばれる中国のブタ (世界の食を言語する アジア・極北編 7：客家語)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野林, 厚志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5148

7
客家語

菜猪とよばれる中国のブタ

国立民族学博物館准教授
野林 厚志
（のばやし あつし）

Profile

1967年生まれ　大阪府出身
専門分野●民族考古学、人間と動物との関係史
著書●『イノシシ狩猟の民族考古学　台湾原住民の生業文化』、『百年來的凝視』（主編）、『「先住民」とはだれか』（共編）、他

ブタは食肉の安定した供給者としての地位を人類の社会の中で確立してきた。ヒツジやヤギ、ウシに比べて、飼料を食肉に変換する効率はブタがもっとも優れているといわれている。また、食肉だけでなく、皮や体毛も利用できるし、人間と同様に雑食性であることから、利用できる飼料の幅も広く、飼育も効率的に行うとができる。ブタは家畜動物の優等生と言ってもよいだろう。そんなブタを財産として大切する社会も世界の各地に見られる。

中国では古来より、主要な家畜（禽）である、ウシ、ヒツジ、イヌ、ウマ、ニワトリ、ブタは六畜として大切に扱われてきた。とりわけ、農村部においてはブタは祖先祭祀や婚姻の際等に供儀するばかりでなく、飼養して売却することによって、現金をえたり、他の商品と交換する重要な家畜とされてきた。またブタを飼養するということは、それだけの労働力や経済力を有していることを示しており、ブタは財産であるという認識が強い時代がしばらくの間、続いてきたと考えてよい。ところが、貨幣経済の浸透にともない、財産としての性格が徐々にブタから失われるようになっている。ブタを飼養する、もしくは所有するという行為が経済的な豊かさを示していた時代から、現金をもつということが豊かさを示す時代に移行していくなかで、ブタが食資源の性格を社会の中で強めている。それを示す一つの現象が、目的に応じたブタの分類とそれに対応したブタの呼称である。

筆者が調査を行ってきた福建省姑田地方の客家（ハッカ）の人々のくらしのなかで、ブタ肉は日常の食事に欠かせない材料

避妊術をほどこされるブタ
（福建省姑田にて筆者撮影）



とされていた。このあたりの方言では、種雄はkyko「猪家［公猪］」、繁殖雌はkymo「猪母［母猪］」とよばれていた。一方で、食用に売却するために去勢や避妊をほどこされた個体はtsweky「菜猪［菜猪］」とよばれていた。この地域では、生まれたばかりの子豚が雄の場合は、生後一週間ほどで去勢をほどこし、雌の場合は卵巣がある程度成熟する三〇kg程度の体重になった時点で避妊手術を行い、いずれも一〇〇kgぐらいになったら食用に供するということが慣行されていた。去勢や避妊をほどこす最大の目的は肥育のスピードをあげるためとされていた。いわば、食肉の効率的な生産を目的とした動物の「加工」が行われていたのである。

「菜」という文字は、食料を意味する。中国料理店のメニューに菜単と書かれていたのを目にすることも少なくないであろう。菜という接頭辞がついたブタは文字通り、食用ブタと翻訳できる。他の動物についてこうした呼び方がされるか否かを現地でたずねたところ、菜を語頭もしくは語尾につけた動物の呼称でその存在が示唆されたのはウシ、ヤギであった。ただし、日常的にこれらの言葉を用いることはなく、「菜」という接頭辞をつけることが可能であるという程度のものであった。ウサギ、イヌ、ニワトリ、ネズミといった姑田で食用の対象となる他の動物については「菜」が接頭辞として冠されることはなかった。さらに重要なのは、食用に供する動物や家禽のうち、去勢が施されるのはブタとニワトリのみであり、他の動物に関しては去勢は慣行されてはいなかったという点である。ウサギを飼養していた家庭では、ウサギを去勢したところで肥育にはさほど影響はなく、むしろコストや施術の面倒さから去勢は行わないとしていた。

生まれてから去勢するまでの個体は性別にかかわらずsiauky「小猪［小猪］」とよばれ、小猪から去勢や避妊がほどこされると「菜猪」という呼称がブタに与えられていた。換言すれば、菜猪は食肉になることが前提の個体であり、その条件として、去勢もしくは避妊という性の消失が伴っていたことになる。逆に、種雄や繁殖雌がその役目を終えた後、食用に供されることはなかった。繁殖に使った個体は食用に適していないという認識がもたれていたのである。このことは、去勢や避妊が単に肥育のスピードをあげるという畜産学的な役割を持つだけでなく、文化的な所作であることを示唆している。去勢や避妊は彼らの言葉で「閹」と表現される。これは、おおい隠すという字義を有している。すなわち、去勢や避妊は、性をおおい隠し、動物を無性化するという文化的な意味も有していると考えることができるだろう。無性化する意味は性をもつものを食することのタブーであり、それがブタという家畜動物に向けられていたことは興味深い。なぜならば、先に述べた食性も含めてブタは生理学的に人間にもっとも近い動物であると同時に、擬人化が他の動物にくらべて格段に強く行われてきた動物だからである。

中国の歴史や文化において、性のタブーは宦官（かんがん）の存在なども含めて興味深いテーマの一つである。食の対象となる動物に対する人間側の認識のありかたもこうしたテーマを考える糸口になりそうである。